

2019年05月24日
(改訂日：2019年7月11日)

お客様各位

株式会社セゾン情報システムズ
HULFT 事業部

HULFT8 for Windows/UNIX/Linux/zLinux の ファイルトリガ機能で発生する不具合について

HULFT8 for Windows/UNIX/Linux/zLinux Ver.8.4.0 において、下記の不具合が発見されましたので、ご報告申し上げます。以下の内容をご確認いただき、ご対応をお願いいたします。

－ 記 －

1. 発生現象

【現象1】

ファイルトリガ情報に9件以上トリガIDが登録されている場合、トリガIDの昇順で9件目以降のファイルトリガ情報の「作成監視 (CREATE)」「削除監視 (DELETE)」「変更監視 (MODIFY)」すべてに“Y (する)”を設定している場合を除き、設定している値どおりに動作しない場合があります。

※ “N (しない)”を指定しているにも関わらず監視対象ファイルの作成、削除、変更を誤検知して、指定したジョブが実行される、もしくは“Y (する)”を指定しているにも関わらず監視対象ファイルの作成、削除、変更を検知せず、指定したジョブが実行されない場合があります。

【現象2】

管理情報パラメータファイル生成コマンド (utligen) において、ファイルトリガ情報を9件以上出力した場合、出力順で9件目以降のファイルトリガ情報の以下の項目が、“N (しない)”を指定しているにもかかわらず“Y (する)”として出力される場合があります。

- ・ 「作成監視 (CREATE)」
- ・ 「削除監視 (DELETE)」
- ・ 「変更監視 (MODIFY)」

2. 発生原因

本現象は、ファイルトリガ情報を一括で読み込む際のメモリ管理に誤りがあることが原因です。

ファイルトリガ情報を一括で読み込む際、9件目以降のファイルトリガ情報の以下の項目に“N (しない)”が指定されている場合、不定値が設定されることで本現象が発生します。

- ・ 「作成監視 (CREATE)」
- ・ 「削除監視 (DELETE)」
- ・ 「変更監視 (MODIFY)」

3. 発生条件

【現象1の発生条件】

HULFT8 for Windows/UNIX/Linux/zLinux Ver. 8.4.0 で以下の条件をすべて満たすと発生する場合があります。

1. ファイルトリガ情報に9件以上、トリガIDを登録している。
2. トリガIDの昇順で9件目以降のファイルトリガ情報について、以下のいずれかの項目に“N(しない)”を指定している。
 - ・ 「作成監視 (CREATE)」
 - ・ 「削除監視 (DELETE)」
 - ・ 「変更監視 (MODIFY)」
3. 以下のいずれかの操作を行う。
 - ・ Windows の場合 :
 - ・ 要求受付プロセスを起動
 - ・ ファイルトリガ情報制御コマンド (utltriggerconf) を実行
 - ・ UNIX/Linux/zLinux の場合 :
 - ・ 要求受付デーモンを起動
 - ・ ファイルトリガ情報制御コマンド (utltriggerconf) を実行
4. 「2.」の条件を満たすファイルトリガ情報の監視対象ファイルについて、以下の操作を行う。
 - ・ 監視対象ファイルを作成する。
 - ・ 監視対象ファイルを削除する。
 - ・ 監視対象ファイルを変更する。

【現象2の発生条件】

HULFT8 for Windows/UNIX/Linux/zLinux Ver. 8.4.0 で以下の条件をすべて満たすと発生する場合があります。

1. ファイルトリガ情報に9件以上、トリガIDを登録している。
2. 任意のファイルトリガ情報の以下のいずれかの項目に“N(しない)”が指定されている。
 - ・ 「作成監視 (CREATE)」
 - ・ 「削除監視 (DELETE)」
 - ・ 「変更監視 (MODIFY)」
3. 管理情報パラメータファイル生成コマンド (utligen) において、以下のパラメータを指定してファイルトリガ情報を9件以上出力する。
 - ・ -i パラメータに“trg”(ファイルトリガ情報)を指定
 - ・ -id パラメータを省略、または-id パラメータにアスタリスク (*) を使用
※ HULFT8 for Windows のみ、-id パラメータを省略可能
4. 出力されたファイルトリガ情報において、出力順で9件目以降のファイルトリガ情報に「2.」の条件を満たすファイルトリガ情報が含まれている。

4. 暫定対処

ファイルトリガ実行用に追加で Ver. 8. 1. 3 を同一環境に導入することで対処を行ってください。

具体的な設定手順と注意事項は以下のとおりです。

<設定手順>

1. Ver. 8. 4. 0 を停止する。
2. Ver. 8. 4. 0 環境の HULFT インストールディレクトリ配下の etc をバックアップする。
3. myHULFT から Ver. 8. 1. 3 用のモジュールのダウンロードとプロダクトキーの発行を行う。
4. Ver. 8. 4. 0 導入環境に Ver. 8. 1. 3 を別ディレクトリに新規インストールする。
5. Ver. 8. 4. 0 環境で登録していた[ファイルトリガ情報]と紐づく[ジョブ起動情報]を Ver. 8. 1. 3 に手動で再登録する。
6. HULFT8 for Windows Ver. 8. 1. 3 の[ジョブ起動情報]に HULFT のユーティリティを登録している場合は、Ver. 8. 4. 0 のユーティリティを実行するよう、絶対パスに書き換える。

HULFT8 for UNIX/Linux/zLinux Ver. 8. 1. 3 の[ジョブ起動情報]に登録しているシェルスクリプト内に相対パス指定の HULFT のユーティリティが登録されている場合、シェルスクリプトの先頭に Ver. 8. 4. 0 の HULPATH と HULEXEP の環境変数を set するように追加書きする。

7. Ver. 8. 4. 0 のすべての[ファイルトリガ情報]の[実行有無]を“N (しない)”に変更する。
8. Ver. 8. 4. 0 を起動する。
9. Ver. 8. 1. 3 の要求受付プロセスのみ起動する (Windows はサービスも起動する)。

<注意事項>

- Ver. 8. 1. 3 で実行した[ファイルトリガ情報]に関する履歴は Ver. 8. 4. 0 にマージさせられません
- 正式対応版リリースを適用する際は、Ver. 8. 1. 3 のアンインストールと Ver. 8. 4. 0 の[ファイルトリガ情報]の[実行有無]を元の設定値に戻す必要があります。
Ver. 8. 1. 3 にて管理情報パラメータファイル生成コマンド(utligen)を用いてファイルトリガ情報を全件エクスポートした後、正式対応版リリース後の環境に管理情報バッチ登録コマンド(utliupdt)でインポートしなおしてください。
- 新規インストールした Ver. 8. 1. 3 の[システム動作環境設定]における「パス」と「ポート番号」を指定する項目は、Ver. 8. 4. 0 と重複しないように設定してください。

5. 対象製品・バージョン

- HULFT8
 - HULFT8 for Windows Ver. 8.4.0
 - HULFT8 for UNIX Ver. 8.4.0
 - HULFT8 for Linux Ver. 8.4.0
 - HULFT8 for zLinux Ver. 8.4.0

6. 正式対応版の提供について

「2019/06/14」に本障害を修正した Ver. 8.4.0A をリリースいたしました。それに伴い障害発生対象の OS の Ver. 8.4.0 は出荷停止しておりますので、Ver. 8.4.0A をご利用ください。

最新のマニュアルやモジュールを入手する場合は、弊社ダウンロードサイトよりダウンロードをお願いいたします。

以上

【改訂履歴】

2019年5月24日	初版作成
2019年6月11日	・6. 正式対応版の提供について 正式対応版のリリース日確定により修正
2019年7月11日	・1. 発生現象について 【現象1】に漏れがあったため追加 ・3. 発生条件について 【現象1の発生条件】の4に誤りがあったため修正 ・6. 正式対応版の提供について 正式対応版のリリース、および、Ver. 8. 4. 0 の出荷停止に関して追記